

西宮神社十日戎開門神事における参加者について (I)

—2001 年から 4 年間の質問紙調査と参与観察から—

荒川 裕紀

The Participants of the Tōka-Ebisu “Opening of the Gate” Ceremony in Nishinomiya Shinto Shrine

ARAKAWA, Hironori

Abstract

Every year on January 10th, the main gate (known as the “Great Red Gate”) at Nishinomiya Shrine in Nishinomiya City, Hyogo Prefecture, is opened at 6 AM for visitors to proceed to the main shrine. The event is known as the Tōka-Ebisu “Opening of the Gate” Ceremony. The first three people to arrive at the main shrine are designated *Fuku-otoko* (lit. “Men of fortune”).

Media coverage of the event has increased from year to year, with not just local Kansai-area media but also the national television networks. Nowadays, we call this “Opening of the Gate” is not “Event” but “Ceremony”.

From previous reports (43rd to 47th of annual reports), Tracing historical changing from Meiji Era to present, I found that some changing of social structures influenced this ceremony. Through these historical events, “Opening of the Gate” ceremony is founded as the “Invention of Tradition”. But from interviewing of participants of ceremonies and *Fuku-otoko*, some of them do participate seriously and with religious meaning.

This report is focus on the participants’ attributes and motives for ceremonies. I started researching about participants with questionnaires form 2001. In this report, I would like to show 4-year questionnaire results from 2001 through 2004. I clarify that about their motives and thoughts for this ceremony from an analysis result.

Key words: EBISU, FUKU-OTOKO, Shinto, Shrine, Nishinomiya, Invention of Tradition, Cultural Events

1. はじめに

これまでの論考（『北九州工業高等専門学校研究報告』43号～47号）において、兵庫県西宮神社で毎年1月の9・10・11日に行われる「十日戎」、その中でも10日の午前6時より行われる、「開門神事」の歴史の変遷についての論考を行ってきた。5つの論考で新聞資料、社務日誌、参加者の語りなどを見ていく中で特に焦点を当てた時代は、明治期から現代までであった。

「改暦」「鉄道の発達」「電鉄の開通」「産業都市化」「日中戦争・太平洋戦争」「空襲による消失」「復興」「高度経済成長」「改元」「メディア報道の過熱化」などの諸要因が、当初行われてきた、十日戎本来の姿ともいえる忌籠祭の形を変容させていった¹⁾。同時にその祭りを支える地域組織が変容し、参加者も、氏子地域以外からも多く訪れることとなった。そのことにより氏子中で行われてきた「イゴモリ」の概念が希薄化したが、副次的に神社の正門である「表大門（赤門）」が日常と非日常の分節化の機能を持つこととなった。そこから「門開け行事」そしてその発展形としての「開門神事」が生み出されてきたことを明らかにした²⁾。まさに西宮で「創られた伝統」が行われてきたのである。

神事においては、門が開いたのち、参加者たちは競って230m近くを疾走し、拝殿を目指す。はじめにたどり着いた3名に対しては1910年代より「一番福」などと呼称されはじめ、戦後になり「福男」の語が定着していったのである³⁾。

これまでの論考の中で、私はこの「福男」と呼ばれた方々へのインタビューを行ってきた。またインタビュー・新聞資料または社務日誌からのみではなく、自身も実際に神事

に参加する参与観察を行うことで、この神事の理解に努めてきた。

これらの調査から見てきたのは、「創られた伝統」でありながらも福男をはじめとする参加者は、そこに「非日常的なものを感じながら参加している」⁴⁾ことや漁村部などで行われてきた「えびす信仰」が移入されてきたことであった。神事という語が、実際に新聞紙上に現れてくるのは平成であり、これに関しては昭和天皇の崩御3日後に行われる中で神社側から主張されていた語ではある⁵⁾が、その前より参加者の複数が宗教的な意識で参加していたことが明らかになった。

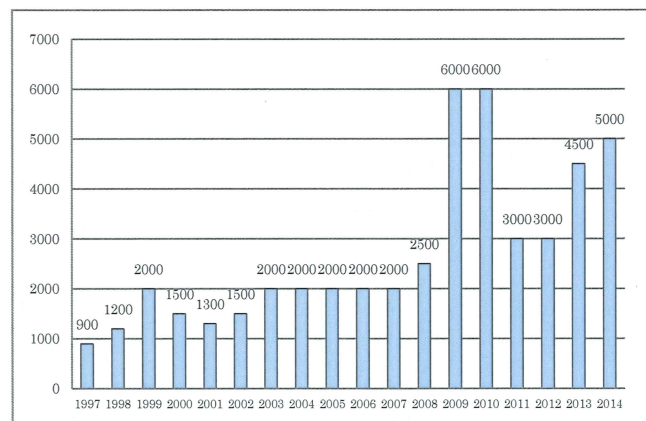


表1: 1997年～2012年までの参加者数の推移(新聞資料から)
近年2010年あたりでは、表1から分かるように参加者は3000名以上、多いときには6000名以上に上っている。近

畿圏の中での注目度はもちろんのこと、全国においても認知度の高い神事となっている。私は 2001 年から 2014 年の現在に至るまで、前記の調査手法に加えて、参加者への質問紙法による社会学的な調査も行ってきた。

当論考に関しては、急激に参加者が増加した 2001 年から 2004 年の 4 年間に、どのような参加者が参加し、またどのような思いで各々が参加しているのかについて明らかにする。これまでの論考に加え、よりマクロな視点を加えていくことにより、この神事の総合的な理解を行っていきたい。

2、調査対象の年度と質問紙の内容

当論考では、特に 2001 年から 2014 年まで継続して行っている十日戎開門神事の参加者への質問紙調査の結果の中で、特に 2001 年から 2004 年という 4 年間の参加者に関する報告をしたい。本論考でまずこの最初の 4 年について報告し、以降で 2005 年から 2008 年、そして 2009 年から現在 (2014 年) までの 3 つに分けて報告をしたい。

3 つに分ける理由としては、門前に参加する参加者の選べ方がある。後述する 2004 年の事件前は、くじ引きをせず自由に門前に並んで開門神事に参加する形であった。2009 年からは神社の公認の講社がくじ引きを実施し、開門前の参加者を選び走らせるようになっている。前者の頃のように長い時間 (1 日から 4 日) を待たずに参加する形ではない。そのため属性・動機などに変化がみられるかもしれないと考えたためである。その間の 2005 年から 2008 年の 4 年間は過渡期である。2004 年の事件によって、これまで以上に報道が過熱した。参与観察の立場からは 2004 年以前と参加者が変化したように感じられた⁶。この 3 つの期間での質問紙法によって属性・動機の比較を行うことで、この参与観察から得られた感覚としての変化が、データに基づいた形で見えるのではないかと考えている。今回は、2004 年までの属性をみて、次回以降でどう変化があったのかを報告し、論考を行いたい。

属性と動機の分析を 14 年間継続して行っている、質問紙の内容は以下の通りである。

(1) 参加者の属性に関するもの。

内容としては①出生地、②幼少期に育った地、③小学生時、④青年期にいた場所、⑤職業、⑥年齢、⑦性別 ⑧部活 (現在)、⑨部活 (過去) の 7 項目。

(2) 十日戎開門神事に関するもの。

①知った時期、②媒体、③参加回数、④参加の動機の 4 項目。

(3) 複数回参加している参加者についての特別な質問。

①前回以前での開門時の気持ちについて、②複数回参加しようと思った理由についての 2 点。である。

まず 1 つ目として (1) によって、彼らの属性分析を行うことで、以前の論考で述べた「高度経済成長によって西宮の旧氏子地域からはるかに遠い地域からの参拝が可能となった」⁷ことやメディアによって「それまでえびす信仰自体があまりなかった地域からの参加者」も増えることに繋がったという言説が支持されるのかどうかを明らかにできる。

2 つ目として、当神事が競走的な側面を多く有しているため、新聞紙上に報道され始めた 1930 年代から運動部の参加者が多かった⁸。現在でも、参与観察や語りからは当然ながら推測ができるが、実際どれくらいの比率で運動部・サー

クルの参加者、ないしは経験者が参加しているのかを知ることができる。

3 つめは、経年的な質問紙調査を行ったことによって、年度ごとにどのような変化があったのかについては分析の結果から明らかにしたい。

そして一番明らかにしたいのは、参加者の動機の部分である。アンケートによって彼らがどのような思いで参加しているのかを知り得ることができるが、こちらも経年的な変化でどのような傾向が多くなるのか、ないしは少なくなるのかが明らかになる。複数回参加者に関しては特に 2 点 (動機と前回以前の参加の際の経験および感想) を聞いたが、ただ項目を選んでもらうのではなく、自由論述という形での回答とした。はじめての参加者と複数回の参加者で動機に対して違いは認められるのか。クロス検定などを行うことによって明らかにしていきたい。

3、2001 年から 2004 年

2001 年から 2004 年の開門神事の実状に関しては、前号の研究報告で述べた。その中でも特に 2004 年にはこの神事のあり方自体を再考する機会が訪れる事件があった。いわゆる「開門神事における福男返上事件」である。

この事件について述べる前に、これまでの調査で明らかになった平成以降の開門神事について述べたい。

神社が公式にこの開門神事を「神事」と呼称したのは平成に入ってからであり、またマスメディアもその神社側の主張もあり、次第に新聞などにおいてもそれまでの「福男レース」や「門開け行事」などの呼称が「神事」に統一された⁹。

ただ内実としては、神社側は門を開け、拝殿にたどり着いた初めの 3 名を福男として認定することはこれまで通りであり、呼称が変わっても大きな変化はなかったように考えられる。私が参与観察を始めた 1997 年・1998 年ごろの様子とそれ以前の参加者や福男からの神事に関する描写が時代的な変化があるにせよ、似通っているのである。

これは新暦の十日戎の門開け行事として「伝統が創られて」以降、門の外側に関して神社側はほとんど規制を行わず、参加者の良識に任せていた面が挙げられる。そのために昭和 30 年代には場所取りを巡っての事件が起きており¹⁰、あまりに激しくなりすぎたことから、兵庫県警の指導によって昭和 41 年から 3 年間は「開門はするが、神社としては公式に福男とは認定しない」としていた。それ以降は、神社も混乱が起こらないための対策をある程度立ててはいたが、昭和の 50 年代、60 年代を通じて参加人数の増加もそこまでなかったために、各参加者が出走する場所を神社側が指定するなどの対策は採られていなかった。

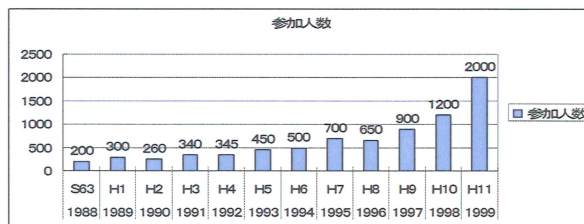


表 2：1988 年～1999 年までの年次別開門神事参加者数
(新聞資料からのデータより著者作成)

しかし、平成となり、神社としても積極的な広報活動¹¹が

奏功したこともあって、神事自体に参加する人数は飛躍的に伸び、表 2 で分かる通り、1999 (平成 11) 年には 2000 名を超えた。2000 年、2001 年は新聞の調査では各々 1500 名と 1300 名となっているが、この数字としても昭和 63 年から考えると 6 倍以上の数字となっている。

この、急増したのちも、開門前の門前の状況は、昭和 50 年代からさほど変わっていないと考えられる。私が最前列での調査を始めた 1998 年、門の前に並び始めようとする人は夕方くらいから集まりだし、晩の 8 時くらいから、前回の一番福だった人物が「そろそろ (場所を) 決めよう」というような、「暗黙の了解」で物事が動いていた。暗黙の了解とは、「最初に来たものから、開門時のスタート位置を決めることができる」ということであった。その時間も極端に早いものではなく (それでも開門の 12 時間以上前ではあったが)、9 日の宵戎であった。

しかし、この「暗黙のルール」はそのまま、人数だけが増えることとなり、先頭グループには様々な参加者が集まることとなった。質問紙調査を始めた 2001 年は、その過渡期だったのである。この「早く来たものからスタート位置を決められる」という暗黙のルールを知った参加者が、多数現れることになった。1998 年には前日の午前中に、1999 年には前日の早朝に、そして、2000 年にはサークル単位で参加をしていた団体がテントを張って一日以上前から並び始めた。2001 年から 2003 年にかけては、その行為がエスカレートをし、3 日前から集まる団体が現れた。2004 年にはより長期間寝泊りをして「順番待ち」をする団体が複数現れ、門前の神苑の場所はさながらテント村、ないしはキャンプ場のようであった。

この早く来ようとするのには門自体の構造もある。一列に並ぶことのできるのは 12 から 13 名であり、門扉は中心から開く。つまり早く来て、良い場所を確保しなければ、いくら足が速くても福男にはなれないということが参加者の中での共通認識となり、またテントを使うなどといった団体が現れたことによって、時間に余裕のある大学生を中心にそのやり方が広まりだしたのである。

また複数での参加を行う団体も多くなったのも、この年度あたりであった。神戸大学には福男サークルができ、集団で参加していた。



新聞記事 1: 朝日新聞 (2003 年 1 月 11 日)「福男サークル」

このように、集団で参加するグループが増加したこと、また一晩明かすのではなく、門の外で数日過ごすなど、これまでなかった動きが現れた。同時に早くから参加者が来ることになり、参加者自体も増加したことによって、混乱が生じることを避けるために、参加者自体が整理券の配布を行なうようになったのもこの時期である¹²⁾。また最初に来たグループが、音頭を取って座る順番を決めるようになったのもこの 4 年間であった。



新聞記事 2: 神戸新聞 (2003 年 1 月 12 日)「開門前の風景」

その中で、「事件」が起きた。2003 年、2004 年において一番早く来た団体は大阪市の消防士たちの団体であった。彼らは非番を利用し、早くからの泊まり込みを可能とした。そして 2004 年 1 月 10 日には、最前列をこの団体が占めた。昨年度も同様のやり方で、真ん中の 1 名の人物が独走するも、最後に転倒し三番福になった。そしてこの年はより強化し、他の参加者に対するブロックを行った。その結果、見事に一番福となったのだが、その映像を見ていた全国の視聴者から「アシストを行っていたのでは」との疑問が呈され、インターネット掲示板ではその書き込みが集中する騒ぎとなった。

事実、参与観察をし、それまでこの神事に関する研究を行っていたこともあった私にも取材が来た。私は「これまでも地元の中学校などの先生が生徒を複数名走らせるというやり方で (ブロックはしていないが前列を独占して) 勝ったこともある。つまり純粋な陸上競技ではないので、考えられない戦術ではない。この勝ち方が良いか悪いかは、私が言えることではない」と話したのだが、それが次の日に以下のような記事となった。

「えべっさんの総本社、兵庫県西宮市の西宮神社で行われた十日えびす恒例の「福男選び」で、トップで本殿に駆け込み「一番福」に認定された大阪市消防局の消防士 (22) を助け、他の参加者を妨害した仲間がいるとして、十日、市消防局などに抗議の電話が相次いだ。参加者には「競技でないのだから、大目に見ても」との声もあるが、同局は「騒ぎになった以上、事実を確かめたい」と、消防士から事情を聴く考えだ。(中略) 一位の「一番福」を巡る参拝客の競り合いは年々加熱。今年は六日夜から表大門付近に場所取りの人が集まり始め、この日には約二千人が参加した。大阪市消防局によると、この日の夜、ニュースで見たという市民らから「二番手以下の前に立

って妨害している人がいた。トップの人を助けたのでは」などの電話が五件あった。また消防士が住む市の消防本部にも同様の抗議電話が十件以上、寄せられたという。参加した神戸市内の会社員(24)も「前の人にブロックされ思うように進めなかった」と言い、初参加した兵庫県内の男性は「スタートと同時に(消防士の)仲間が腕を組みようにして進路を阻んだ」と話していた。

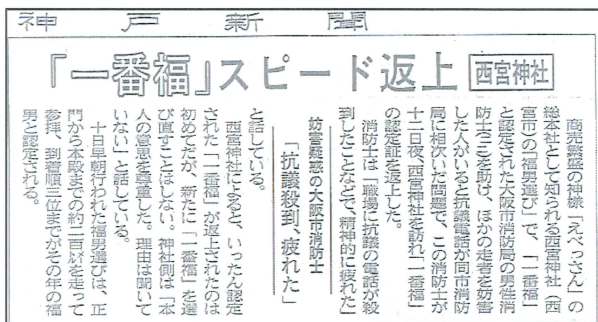
消防士は「確かに仲間と一緒に走ったが、妨害行為は一切ない。ねたみの声があるのでしょうか」としている。福男に関する著作があり、毎年参加している西宮市の高校教諭は「(妨害は)よくあること。周りに『ブロックがすごかった』との声もあったが、福男選は陸上競技ではない。チームプレーで勝つのもありだ」と話している」(2004 年 1 月 11 日読売新聞)



新聞記事 3 : 読売新聞 (2004 年 1 月 11 日)

この報道が、インターネット版のニュースにも掲載され、Yahoo! JAPAN のニュースサイトにも掲載された。この年は連休だったこともあり、多くの人もこのサイトを見て、また 2ch などの掲示板では「祭り」状態となっていました。

この結果を受けて、一番福はこの開門競争が始まって以来の福男返上を 12 日夜に行った¹³。



新聞記事 4 : 神戸新聞 (2004 年 1 月 13 日)

この事件によって、門を開ける・福男を認定する主催者の神社の存在はあるが、急激に増加した参加者に氏子・神社が対応できていなかったことが明らかになった。

同時にこの事件があったために、参加者と神社と一緒にこの神事を運営していこうという機運が生まれるこ

ととなった。

4 年後にそのようなことが起こるとはあまり考えずに始めた質問紙調査であったが、この昭和・平成と動き、地元の作られた祭りから近畿・全国で注目される祭りへの過渡期、どのような参加者がどのような思いで行事に参加していたのかを知ることができるのは、貴重である。

ちなみにその後 2005 年から 2008 年までの 4 年間は、参加者の主だったメンバーに、研究を行ってきた私も加わり、既存の氏子青年会「若戎会」の組織の中で「開門神事保存会」として活動を行った。先述の問題を解決すべく、くじ引き方式の導入を決めた。また、加熱するメディアへの対応に苦慮した。また、それまで地縁とは関係のなかった参加者がほとんどだったために、地元の氏子青年会の中に入って活動するにも抵抗がある参加者も多かった。しかし、理解者も多く、その 4 年がたったのち、2008 年の 12 月に元福男の平尾亮氏(1997 年と 1998 年二番福)を講長とする「西宮神社十日戎開門神事講社」が誕生した¹⁴のである。

今回の質問紙調査に関しては、この事件の起きるまでの「比較的ルールも少なく、くじ引きがなかった」4 年間のデータである。

4. 各年度ごとの調査人数

2005 年からのくじ引きの試行段階が終わり、2009 年から現在においては、1500 名程度の参加希望者が 1 月 10 日の午前 0 時をもってくじ引きをするやり方を取っている。

くじによって、参加希望者で前列に来る A グループ 108 名(12 名×9 列)と B グループ 200 名(5 メートル近く離れてから時間をずらして出走)の 2 グループを選出する。



写真 1: 2012 年 1 月 10 日の門前(手前が B グループの 200 名、奥が A グループの 108 名) 鈴木 善哉氏撮影

2009 年からは主にこの前に来る A グループを中心にアンケート調査をしている。この方式に切り替えて以降、調査者自身が神事の運営にも当たることになったために、A のくじを引いた人全てに、協力のもと回答をしてもらうという流れが生まれることとなった。そのため毎年 100 名以上の被調査者を確保できることとなったが、初めの 4 年間は質問紙調査を行う際に関しては、運営者ではなく、このような流れを作ることは難しかった。そのため参与観察をしながら、参加者に声をかけ、回答をもらえる参加者のみにアンケートを行う手法をとっていた。アンケート回答者は門前に並んでいる参加者であり、開門まで待っている時間を使ってもらい回答を得た。その結果が、次の通り

である。

NENDO				
	年度	度数	パーセント	有効パーセント
有効	2001年度	19	15.6	15.6
	2002年度	34	27.9	27.9
	2003年度	35	28.7	28.7
	2004年度	34	27.9	27.9
	合計	122	100.0	100.0

表 3：各年度の質問紙の被調査者人数

初年度は、初めての試みということもあって、難しかったが、2002 年度からは 35 名程度の回答者を得ることができた。社会統計上、ランダムに被調査者を選ぶ手法も考えられたが、回答率を考え、また早くから並んでいる比較的熱心な参加者のデータとなっている。

5. 参加者の属性

(1) 性別・年齢・職業

被調査者の性別に関しては 122 名の中で男性が 113 名、女性が 8 名（無回答 1 名）であった。女性も実際に走る服装で参加している。

年齢に関しては、16 歳から 35 歳までの参加者がいた。このようにみると、やはり 18 歳から 22 歳という大学生相当の年齢層が多い。23 歳までを含めると 70%を超えている。この理由としては、やはり、夜を徹する、あるいはテントなどで何晩かを過ごすものであり、高校生ないしは社会人が多くなる他の年齢層では参加が難しくなっていることが分かる。年度とのクロス検定も行ったが、年齢に関しては、4 年間で大きな変化は見られなかった。

年齢				
	年齢	度数	パーセント	有効パーセント
有効	16	1	.8	.8
	17	7	5.7	5.7
	18	12	9.8	9.8
	19	16	13.1	13.1
	20	18	14.8	14.8
	21	19	15.6	15.6
	22	13	10.7	10.7
	23	9	7.4	7.4
	24	5	4.1	4.1
	25	4	3.3	3.3
	26	1	.8	.8
	27	2	1.6	1.6
	28	3	2.5	2.5
	29	2	1.6	1.6
	30	3	2.5	2.5
	31	1	.8	.8
	32	3	2.5	2.5
	33	2	1.6	1.6
	35	1	.8	.8
	合計	122	100.0	100.0

表 4：4 年全てにおける参加者の年齢

職業としては次の通りになった。圧倒的に短大・専門学校・大学・大学院生が多いことが分かる。やはり、開門までの時間を過ごさなければならぬために、職を持つ人の参加はなかなか難しいのかもしれない。

その制約にもかかわらず、社会人でも参加していることが分かる。年度とのクロス検定をしても同じような比率で推移している。もちろんすべての門前の参加者の調査の結果ではないが、4 年間で大きな差異はない。

現在の職業				
	職業	度数	パーセント	有効パーセント
有効	高校生	14	11.5	11.6
	短大・専門学校	73	59.8	60.3
	大学・大学院生	3	2.5	2.5
	フリーター	7	5.7	5.8
	販売・営業	5	4.1	4.1
	エンジニア	10	8.2	8.3
	公務員	2	1.6	1.7
	教員	3	2.5	2.5
	自営業	4	3.3	3.3
	その他	121	99.2	100.0
	合計	122	100.0	
	欠損値	1	.8	

表 5：参加者の職業

NENDO と現在の職業 のクロス表										
年度	現在の職業									
	高校生	短大・専門学校生	大学・大学院生	フリーター	販売・営業	エンジニア	公務員	教員	自営業	その他
NENI 2001	12	2	1	3	1	3	1	1		19
2002	4	24	1	2	2	1	1			34
2003	5	20	3	1	4		1			34
2004	5	17	1	3	1	1	1	1	4	34
合計	14	73	3	7	5	10	2	3	4	121

表 6：参加者の職業と年度とのクロス検定

(2) 出身地

出生地、幼少期・小学生・青年期に関する質問に関して、ここでは出生地と青年期の 2 つの結果を提示したい。

出生地				
	出生地	度数	パーセント	有効パーセント
有効	兵庫県某所	1	.8	.8
	三田市	1	.8	.8
	川西市	2	1.6	1.6
	津名町	1	.8	.8
	西宮市	16	13.1	13.1
	神戸市	9	7.4	7.4
	尼崎市	7	5.7	5.7
	姫路市	3	2.5	2.5
	宝塚市	4	3.3	3.3
	三木市	1	.8	.8
	加古川市	1	.8	.8
	伊丹市	3	2.5	2.5
	柏原市	1	.8	.8
	大阪市	11	9.0	9.0
	池田市	1	.8	.8
	大東市	1	.8	.8
	茨木市	1	.8	.8
	豊能町	2	1.6	1.6
	篠栗川市	1	.8	.8
	八尾市	1	.8	.8
	吹田市	2	1.6	1.6
	東大阪市	2	1.6	1.6
	宇治市	4	3.3	3.3
	京都市	5	4.1	4.1
	高槻市	1	.8	.8
	野洲町	2	1.6	1.6
	大和郡市	1	.8	.8
	安堵町	1	.8	.8
	広島県	1	.8	.8
	神奈川県	2	1.6	1.6
	北海道	3	2.5	2.5
	東京	6	4.9	4.9
	福井県	2	1.6	1.6
	福岡県	5	4.1	4.1
	愛媛県	1	.8	.8
	アメリカ	1	.8	.8
	石川県	2	1.6	1.6
	島根県	1	.8	.8
	愛知県	1	.8	.8
	岡山県	4	3.3	3.3
	広島県	1	.8	.8
	山口県	1	.8	.8
	佐賀県	1	.8	.8
	栃木県	2	1.6	1.6
	香川県	1	.8	.8
	大分県	1	.8	.8
	合計	122	100.0	100.0

表 7：参加者の出生地

出生地、青年期の大半を過ごした地域（多くが現住所）ともに西宮・神戸・尼崎・宝塚が多いが、青年期が 39%、出生地としては 29.5%ほどである。大阪（摂津・河内・和泉）や兵庫西部（播磨）、京都、滋賀など、旧来の兵庫県東部（摂津）以外からもたくさん訪れていることが明らかになった。

また、近畿圏以外の地域からきているのも興味深い。たとえば北海道（2 名）東京都（6 名）神奈川県（3 名）である。十日戎よりも西の市が盛んな関東地域からの参加者もいる。年度ごとのクロス検定（別表 1）では、この東京・神奈川・北海道に関しては 4 年間でコンスタントに参加している。調査対象の母数の少なさもあるが、ある年度から突然参加しだしたというような差異は認められなかった。これより以前のデータは採っていないが、この 4 年間では、70%～80% 台が近畿圏の参加者（2001 年 17/19、2002 年 25/34、2003 年 27/35、2004 年 27/34）となっている。

青年期				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	122	100.0	100.0	100.0
兵庫県東部	1	.8	.8	.8
三田市	1	.8	.8	1.6
川西市	3	2.5	2.5	4.1
津名町	1	.8	.8	4.9
西宮市	25	20.5	20.5	25.4
神戸市	10	8.2	8.2	33.6
尼崎市	7	5.7	5.7	39.3
姫路市	3	2.5	2.5	41.8
宝塚市	6	4.9	4.9	46.7
三木市	1	.8	.8	47.5
加古川市	1	.8	.8	48.4
香取町	1	.8	.8	49.2
柏原市	1	.8	.8	50.0
大阪市	5	4.1	4.1	54.1
堺市	2	1.6	1.6	55.7
茨木市	2	1.6	1.6	57.4
豊能町	3	2.5	2.5	59.8
寝屋川市	1	.8	.8	60.7
八尾市	1	.8	.8	61.5
吹田市	3	2.5	2.5	63.9
東大阪市	1	.8	.8	64.8
熊取町	1	.8	.8	65.6
宇治市	3	2.5	2.5	68.0
木津町	1	.8	.8	68.9
京都市	6	4.9	4.9	73.8
高槻市	1	.8	.8	74.6
野洲町	2	1.6	1.6	76.2
草津市	1	.8	.8	77.0
大和郡市	1	.8	.8	77.9
安堵町	1	.8	.8	78.7
神奈川県	3	2.5	2.5	81.1
北海道	2	1.6	1.6	82.8
東京	6	4.9	4.9	87.7
福井県	1	.8	.8	88.5
富山県	1	.8	.8	89.3
福井県	1	.8	.8	90.2
愛媛県	1	.8	.8	91.0
石川県	2	1.6	1.6	92.6
島根県	1	.8	.8	93.4
愛知県	2	1.6	1.6	95.1
岡山県	1	.8	.8	95.9
広島県	1	.8	.8	96.7
栃木県	1	.8	.8	97.5
香川県	2	1.6	1.6	99.2
大分県	1	.8	.8	100.0
合計	122	100.0	100.0	100.0

表 8：参加者の青年期を過ごした場所（出身）

青年期県別				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	122	100.0	100.0	100.0
兵庫県	60	49.2	49.2	49.2
大阪府	21	17.2	17.2	66.4
京都府	10	8.2	8.2	74.6
滋賀県	3	2.5	2.5	77.0
奈良県	2	1.6	1.6	78.7
神奈川県	3	2.5	2.5	81.1
北海道	2	1.6	1.6	82.8
東京都	6	4.9	4.9	87.7
福井県	1	.8	.8	88.5
富山県	1	.8	.8	89.3
福井県	1	.8	.8	90.2
愛媛県	1	.8	.8	91.0
石川県	2	1.6	1.6	92.6
島根県	1	.8	.8	93.4
愛知県	2	1.6	1.6	95.1
岡山県	1	.8	.8	95.9
広島県	1	.8	.8	96.7
栃木県	1	.8	.8	97.5
香川県	2	1.6	1.6	99.2
大分県	1	.8	.8	100.0
合計	122	100.0	100.0	100.0

表 9：参加者の青年期を過ごした場所（県別）

(3) 出場回数

出場回数に関しては、以下のようになった。

何回目の出場か？				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	122	100.0	100.0	100.0
1	72	59.0	59.0	59.0
2	24	19.7	19.8	79.3
3	12	9.8	9.9	89.3
4	7	5.7	5.8	95.0
5	3	2.5	2.5	97.5
6	2	1.6	1.7	99.2
8	1	.8	.8	100.0
合計	121	99.2	100.0	
欠損値	1	.8		
システム欠損値	1	.8		
合計	122	100.0		

表 10：出場回数

門前に前夜から並んでいる、競争にきた参加者を対象にしているが、彼らの 6 割近い参加者が初出場であることがここで分かる。逆に複数回参加している参加者が 4 割であることは興味深い。

(4) クラブ活動・スポーツの経験

現在行っている、クラブ（運動部）活動・スポーツ競技では、以下のようになった。

現在スポーツクラブに所属しているか？				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	122	100.0	100.0	100.0
はい	65	53.3	53.3	53.3
いいえ	57	46.7	46.7	100.0
合計	122	100.0		

表 11：運動部・スポーツ競技活動の有無（現在）

過去の運動部経験の有無				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	122	100.0	100.0	100.0
はい	68	55.7	55.7	55.7
いいえ	11	9.0	13.9	100.0
合計	79	64.8		
欠損値	43	35.2		
システム欠損値	43	35.2		
合計	122	100.0		

表 12：運動部・スポーツ競技活動の有無（過去）

表 9 は現在のクラブ活動の有無、表 10 は現在行っていない人たち、運動部・サークル経験の有無である。過去の経験の回答を間違えて回答している被調査者（10 名ほど）がいるが、いいえと回答している人が 11 名。122 名中の 9% である。走りを主とする神事であるために、やはりある程度の運動経験が必要ということが認識されていることが分かる。

また具体的なスポーツ名では、次のようになった。

スポーツの種類				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	122	100.0	100.0	100.0
陸上	25	20.5	20.5	20.5
野球	6	4.9	4.9	25.4
ラグビー	2	1.6	3.1	28.5
ボウリング	3	2.5	4.6	33.1
サッカー	4	3.3	6.2	39.3
バスケットボール	1	.8	1.5	40.8
体操	1	.8	1.5	42.3
バレーボール	1	.8	1.5	43.8
スポーツジム	1	.8	1.5	45.3
探検	1	.8	1.5	46.8
空手道	2	1.6	3.1	49.9
トリアスロン	4	3.3	6.2	56.1
福男サークル	2	1.6	3.1	59.2
さまざま	1	.8	1.5	60.7
柔道	1	.8	1.5	62.2
ハンドボール	1	.8	1.5	63.7
回答拒否	1	.8	1.5	65.2
ヨット・クルージング	2	1.6	3.1	68.3
ラクロス	4	3.3	6.2	74.5
ボイスカウト	1	.8	1.5	76.0
弓道	1	.8	1.5	77.5
合計	65	53.3	100.0	
欠損値	57	46.7		
システム欠損値	57	46.7		
合計	122	100.0		

表 13：現在行っているスポーツの種類

圧倒的に多いのが陸上競技（25 名）であり、過去に関しても 22 名であった。そのあとに野球・サッカー・トリアス

ロン・ラクロスと続いている。過去のスポーツもサッカー(9名)、野球(5名)、ラグビー・バスケットボール(4名)、水泳・剣道・バレーボール・体操(3名)、空手道・柔道(2名)などと続いており、やはり走ることに主眼を置いたスポーツの経験者が数多く参加していることが分かった。

(5) いつ、どこで十日戎と開門神事を知ったか

いつから十日戎を知っていたか？				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 幼少期から	13	10.7	10.7	10.7
小学生の頃	22	18.0	18.0	28.7
中学・高校生の頃	48	39.3	39.3	68.0
それ以降	39	32.0	32.0	100.0
合計	122	100.0	100.0	

表 14：いつ十日戎を知ったのか

いつから十日戎開門神事を知ったか？				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 幼少期から	6	4.9	4.9	4.9
小学生の頃	19	15.6	15.6	20.5
中学・高校生の頃	48	39.3	39.3	59.8
それ以降	49	40.2	40.2	100.0
合計	122	100.0	100.0	

表 15：いつ開門神事を知ったのか

この 2 つの「いつから十日戎を知っていたか」と「いつから十日戎開門神事を知ったのか」という問いは、十日戎と開門神事が一緒に語られていないかもしれないという予測から作った項目であった。結果として、大きな差異は認められなかったが、「十日戎」のほうが、より若い時期より知っていて、開門神事はその後で知れたという回答者が当時は多いことが分かる。予測としては 10 年経った現在(2014 年)とは異なると考えられる。その意味で興味深い。

また、開門神事に関しては 70%以上が中学生以降に知ったということ。次の質問の媒体にも関連するが、氏子地域でない人たちにとって、幼いころより参加するものではない神事そして祭り(十日戎)ということがうかがえる。

どこから十日戎を知ったか？				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 親兄弟から	17	13.9	13.9	13.9
親戚から	5	4.1	4.1	18.0
近所の人から	5	4.1	4.1	22.1
仕事の同僚から	5	4.1	4.1	26.2
学校の友人から	23	18.9	18.9	45.1
新聞	1	.8	.8	45.9
テレビ	65	53.3	53.3	99.2
インターネット	1	.8	.8	100.0
合計	122	100.0	100.0	

表 16：どの媒体から十日戎を知ったのか

どこから十日戎開門神事を知ったか？				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 親兄弟から	11	9.0	9.0	9.0
親戚から	3	2.5	2.5	11.5
近所の人から	4	3.3	3.3	14.8
仕事の同僚から	5	4.1	4.1	18.9
学校の友人から	25	20.5	20.5	39.3
テレビ	69	56.6	56.6	95.9
ラジオ	1	.8	.8	96.7
インターネット	3	2.5	2.5	99.2
その他	1	.8	.8	100.0
合計	122	100.0	100.0	

表 17：どの媒体から開門神事を知ったのか

この 2 つの「どの媒体から十日戎を知ったのか」「どの媒体から開門神事」を知ったのかという問いからも興味深い

結果が現れた。それは十日戎開門神事を知ったのが、多くが「テレビから」であったこと、同時に「学校の友人から」もたらされた情報も大きなメディアであることが分かる。十日戎自体のほうが親兄弟・親戚からというのが少し多い。

また出身地で具体的な有意差が現れるのではないかと出身地と上記の 2 つの項目でクロス検定を行ってはみたが具体的な差異は現れなかった。このことから十日戎開門神事を参加者が知るのには、出身地に関係なく、テレビもしくは学校や職場での人間関係であるといえる。

6、参加した動機に関して

参加した動機に関しては、自由回答であったため、よく似た項目でまとめた。以下のような結果となった。

なぜ参加したのか？				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 友人・先輩からの誘い	30	24.6	25.0	25.0
面白そうだから・好奇心から	16	13.1	13.3	38.3
自分が勝つため・挑戦	4	3.3	3.3	41.7
体が行きたいと欲する	1	.8	.8	42.5
運をつける・福にあやかる	5	4.1	4.2	46.7
友人に会えるから	4	3.3	3.3	50.0
各種メディアに取り上げられた	6	4.9	5.0	55.0
記念に・思い出作りとして	11	9.0	9.2	64.2
なにか燃えることをしたい	9	7.4	7.5	71.7
勝ちたい・一番になりたい・福男になりたい	13	10.7	10.8	82.5
平等に参加できるから	1	.8	.8	83.3
気合いを入れるため	3	2.5	2.5	85.8
祭りだから	1	.8	.8	86.7
ボイスカウト活動の一環として	4	3.3	3.3	90.0
テレビを見て	2	1.6	1.7	91.7
自分にとって年中行事の一つだから	1	.8	.8	92.5
歴史に名を残したいと思ったから	1	.8	.8	93.3
関東にはこのような祭りはないから	1	.8	.8	94.2
福男サークルに所属しているため	2	1.6	1.7	95.8
何か行事に関わりた	1	.8	.8	96.7
高3で学校がないため	1	.8	.8	97.5
商品につられて	1	.8	.8	98.3
厄年だから	1	.8	.8	99.2
特になし	1	.8	.8	100.0
合計	120	98.4	100.0	
欠損値	2	1.6		
合計	122	100.0		

表 18：参加動機

興味深いことは、25%ほどが、自分のみの意志ではなく、先輩や友人の誘いであることである。そして、次に多いのは、「好奇心」そして「勝ちたい・福男になりたいという」「記念に」と続く。より、勝ちたいもののみが参加していると考えがちであるが、まずはどんなものなのか参加してみたいというのが強いことが明らかになった。この辺りは複数回参加した人物とでは少しは変わるかもしれない。

参加回数とのクロス集計に関しては(別表 2)の結果になった。この表から見ると 1 回目の参加時の動機では先輩・友人の薦めであることが多い。3 割近くを占めているが 2 回目以降この回答は減り、「勝つため」「挑戦するため」や「友人に会えるから」などといった回答が現れるようになっていく。

7、複数回参加者の感想と動機

アンケートにおいては、複数回参加している参加者に特に質問項目を設けた。何回も参加する理由や、開門の瞬間に関する心の動きなどに関してなにがしらの回答を得られることを期待してのことである。結果としては、興味深いものが得られた。まず、開門の瞬間に関する感想である。こちら自由論述にしてもらったため、回答が多岐に渡っ

た。よく似た項目をまとめて結果とした。

門の開くときの気持ち				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 「絶対勝つ！」という気になった	3	2.5	6.5	6.5
スローモーションのようだった	1	.8	2.2	8.7
興奮する	5	4.1	10.9	19.6
まるで白銀の世界が現れたようだった	2	1.6	4.3	23.9
「やっと開いた」の心境	1	.8	2.2	26.1
頭の中が真っ白になった	9	7.4	19.6	45.7
感動した	2	1.6	4.3	50.0
びっくりした	2	1.6	4.3	54.3
緊張した	7	5.7	15.2	69.6
恐ろしい・怖い	6	4.9	13.0	82.6
開放感で一杯であった	1	.8	2.2	84.8
苦しかった	1	.8	2.2	87.0
妨害させられた	1	.8	2.2	89.1
特になし	1	.8	2.2	91.3
(状況を見て)勝てないと思った	1	.8	2.2	93.5
むちゃくちゃであった	2	1.6	4.3	97.8
ラッキーだった。	1	.8	2.2	100.0
合計	46	37.7	100.0	
欠損値 システム欠損値	76	62.3		
合計	122	100.0		

表 19：複数回参加者による開門時の気持ち

陸上競技関係者が多く、競争には慣れているはずだが、一番多かった回答が「頭の中が真っ白になった」(9名)、「緊張した」(7名)「恐ろしい・怖い」(6名)であった。いかに場馴れしていても神事独特の雰囲気のために起こっているのかも知れない。

その他の回答である、「感動した」「びっくりした」「まるで白銀の世界が現れたようだった」なども興味深い。レースとして出場したが、参加してみて全く違った感覚に捉われたのかもしれない。回数別でのクロス検定(別表 3)では、「頭の中が真っ白になった」とコメントをしているのはコンスタントに現れている。「緊張」「恐ろしい」「感動した」なども同様である。「絶対勝つ」という意見もあるが、興味深いのは多くが非日常性を語っているものが多いことである。そして「興奮」している。(全体で 5 名)かけっこ競争の側面とともに、なにか非日常なものとして複数回参加している参加者は考えているのではないか。

また「なぜ今年も参加しようと思ったのか」の問いに対する回答は以下ようになった。

なぜ今年も走ろうと思ったのか？				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 来年より良い順位に 一番を取りに行く	27	22.1	55.1	55.1
門に吸い寄せられた 自分の中で年中行事 の一つだから	5	4.1	10.2	65.3
先輩・友人の誘い	5	4.1	10.2	75.5
メディアにもう一度出 たい。目立ちたい。	2	1.6	4.1	79.6
体中が熱くなる体験 を、もう一度してみた	1	.8	2.0	81.6
門に集まった友人に 会いたい	4	3.3	8.2	89.8
去年参加して楽しか たから	2	1.6	4.1	93.9
参加する事に意義が あると思ったから	1	.8	2.0	95.9
今年もこけずに完走 したいから	2	1.6	4.1	100.0
合計	49	40.2	100.0	
欠損値 システム欠損値	73	59.8		
合計	122	100.0		

表 20：複数回参加者による開門時の気持ち

27 名が、「昨年よりも良い順位になりたいため」、や「一番を取りに行く」という競争としての感想を述べているのが印象的である。49 名の参加者から考えると実に半数近く

である。一回目に参加し、ある程度コースにも慣れたために次は福男を狙いに行こうというのが考えられる。

同時に留意したいのは参加回数とのクロス検定である。(別表 4) 確かに 3 回、4 回と数を重ねても「良い順位になりたいため」は多い(3 回目 8 名、4 回目 4 名)。だが、興味深いのは「門に吸い寄せられた・自分の中での年中行事の 1 つだから」などと述べている回答が 4 回目・5 回目 6 回目と参加している参加者から出ている。また「門に集まった友人に会いたい」という回答もあり、一年に一回の出会いに重点を置く参加者がいることも明らかになった。

8、4 年間のデータから明らかになったこと

先述の変遷で述べた通り、過渡期の 4 年間であった。特に参加者の属性から分かったことは 2001 年から 2004 年の間においては、広義での氏子区域(兵庫県摂津地域)よりも、より広範囲な地域から参加していたことであった。これまでの論考で述べた、メディアが積極的に取り上げること、特に近畿圏では有名な行事の 1 つになっていったのがこの 2001 年より少し前の時期¹⁵⁾だと推測される。

この 4 年間に限っては、参加者は開門神事の前にまず門前に赴き、いい場所を確保しなければならなかった。そして、その良いポジションを何時間も確保しておかなければならないという不文律が存在していた。そのため時間がある学生が多く参加していることが、この属性の分析の結果改めて明らかになった。走るための体力の部分もちろんあって、若年層であることも必要な条件だが、時間がとりやすいことも条件であることは、以前ないしは以降の神事とは大きく異なってくるのではないか。そのためにこの 4 年間ではある程度、固定化された年代が参加していたことが明らかになった。

動機で興味深かったことは、プル要因として「友人・先輩の誘い」が大きかったことである。テレビなどで広報され、このような神事があることを知るが、実際に行動としておこす際には、友人・先輩などの身近な人々の働きかけが大きいことが改めて明らかになった。

前回の論考では、祭りとしての参加自由度の高さから様々な人々が入りやすいと述べたが、当神事の最終的に参加決定の要因としては、知り合いの薦めが大きく作用することが分かったことは大きい。この年代だから起こりえたことなのか、以降の参加者の属性・動機を分析することでより見えてくるだろう。

2004 年以降は、インターネットで大きく取り上げられたこともあり、インターネットでこの神事を知って参加した参加者が増えると予測される。しかし、実際に西宮神社の門前にまでたどり着いて、参加するとなるとどういった働きかけが、有効であったのか。この 2001 年から 2004 年までのデータのように友人たちとの働きかけが同じように有効になっているのか。この辺りは次回以降の課題としたい。

複数回参加している参加者の動機と門が開いた時の感想は、興味深い。ほとんどの参加者が第一義には「走るため、良い順位を取るため」に参加している。参加者のほとんども運動部経験者であり、陸上部出身も多い。それにも関わらず、門が開いた時は「感動」し「びっくり」し、「頭の中が真っ白に」になっているのである。普通のレースとは違う非日常の世界を感じていると言えるのではないか。その

いつもとは違った感覚から「門に吸い寄せられ」「年中行事として」参加する参加者も現れてきていることが明らかになった。または、一年に一回だけの出会いの場としてこの場に来ることを待ち望んでいる参加者がいることも明らかになった。ただのレースではない、「非日常のなにか」として認識し、参加している人物たちが少数ながらも現れていることが明らかになった。

9、考察：この時期の開門神事と参加者とは

この時期は、報道各社の報道がエスカレートしていった時期である。数日前から並ぶという考えは、もともとなかった。私が調べてきた中では 1999 年 2 月に在京キー局の放送が現講長の平尾氏を取り上げた時、その番組での司会であった、所ジョージ氏が「何日も待つ中で、(門の前で) 少しずつ移動して移動してポジションを作り出す」との発言が初めてである。そして実際に多くの参加者が泊まり込みを行うようになっていった。その意味で、マスメディアが変容させていったとも言えなくはない。門前での主催者が不在であり、変容しやすい神事であったことも大きな要因であっただろう。

その変容に地元の社会が追い付いていなかった。2004 年の「事件」後、なぜ集団で妨害行為をしたのかについて、1 月 23 日の産経新聞ではこう書かれている。

「一昨年に参加した時、消防士が妨害を受けたので、援護するために、昨年から(妨害行為を)やった」

私も 2002 年の 1 月 10 日の開門神事のこの場面を参与観察者として、覚えている。門前に整然と並んでいた開門直前の 15 分前、外から数名の闖入者が入り、順番がばらばらとなったのである。参加者の数名は注意をしたが、喧嘩にならなかつたために、結局はそのままの入り混じった状態で一緒に走ったのである¹⁶。これらの諸問題から平尾亮氏は神社と話をして改善を試みる形をとり、他のグループは集団で自衛や早く来て宿泊をする形をとったのである。そのことが 2004 年の事件につながった。地域社会や神社がもう少し早く、抜本的な改善をすることも出来たかもしれない。

このように競争という側面、無秩序な状態に目が行きがちではある。しかし、きっかけはどうであれ、神事に参加してその非日常性に触れ、複数回参加しようとする参加者が存在していたことはこれまでの論考でも明らかにしていた。

今回、より多くの参加者の属性・動機を質問紙から分析することで、西宮神社のえびす信仰の地域以外のところからの参加者を集めながら、その中で着実にこの神事に非日常性な部分を感じながら参加する人々がいたことを改めて明らかにした。これまでのインタビューで得てきた福男の語りの部分を補完するものである。

創られた伝統の中で生み出された「開門神事」であり、その走り参りの部分に注目されがちであるが、参加者たちは、ここに非日常的な「何か」を込めながら参加をしていた。これは「祭り」の大きな部分ではないか。

この 2004 年のあと、大きく神事の運営が変化していくが、参加者たち自体の属性と動機・感想の部分はどう変化していくのか。質問紙と被調査者への語りにこれから注目しながら論考を進めていきたい。

(注)

- 1 特に改暦と電鉄の発達は、それまでの忌籠祭を大きく変容させた。平山昇氏の「明治・大正期の西宮神社十日戎」『国立民俗学博物館研究報告第 155 集』pp.151-171 の中で、大阪・神戸からの都市住民が新暦の十日戎に終夜参拝に訪れ、忌籠の必要性から、やむを得ず西宮神社側が門を開めたとある。時間の分節化の装置としての門が生まれた。
- 2 荒川「西宮神社十日戎開門神事における 1930 年代 40 年代の変遷」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 44 号 2011/1 pp.112
- 3 荒川「太平洋戦争後の十日戎開門神事」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 45 号 2012/1 pp.104-111
- 4 たとえば、平尾氏は「門が開くときの高揚感是最前列にいないくても味わえる」と話している(荒川「昭和晩期以降における十日戎開門神事の変遷—新聞資料、インタビュー、参与観察を通じて—」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 47 号 2014/1 pp.78) 高揚感、非日常といった言葉は参加者からは多く聞かれる。
- 5 荒川「昭和晩期以降における十日戎開門神事の変遷—新聞資料、インタビュー、参与観察を通じて—」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 47 号 2014/1 pp.72-73
- 6 あくまで参与観察からの私見であるが、これまで以上に走ることもよりもメディアに露出することを目的とする人が増えたと感じた。この辺りは次回以降で論考したい。
- 7 荒川「十日戎開門「神事」の創造・「門開け」から「神事」へ 高度経済成長以降の日本文化のあり方に関する一考察」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 47 号 2014/1 pp.60-61
- 8 新聞紙上にも現れているが、1945 年の福男の上田研蔵氏によると、時局厳しい 1945 年当時でも近隣の中学校の陸上経験者が多く集まっていたとのことである。
- 9 荒川「昭和晩期以降における十日戎開門神事の変遷—新聞資料、インタビュー、参与観察を通じて—」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 47 号 2014/1 pp.73-75
- 10 荒川「十日戎開門「神事」の創造・「門開け」から「神事」へ 高度経済成長以降の日本文化のあり方に関する一考察」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 47 号 2014/1 pp.59
- 11 積極的な広報活動にも関わらず、当時の新聞をみると阪神大震災などによって、復興の文脈として語られることも多かったことも挙げられる。
- 12 初めて整理券を配り出したのは 2000 年ないしは 2001 年だった。それまでは早くに来る参加者もそれほど存在しなかったため、必要がなかったともいえる。元福男(1985 年,1986 年,1989 年の二番福であった江原氏)が始めた。
- 13 返上はしたが、一番に拝殿にたどり着いたのは彼であり、本論考を含め、私は 2004 年の一番福は彼としている。昭和 40 年代福男が正式に認定されなかった時期の一番福も福男としている。
- 14 荒川「昭和晩期以降における十日戎開門神事の変遷—新聞資料、インタビュー、参与観察を通じて—」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 47 号 2014/1 pp.79
- 15 荒川前掲書 pp.75 筆者は 1997 年より参与観察を行っているが、1997 年当時より在阪局は中継を行うようになっており、芸能人を一緒に走らせる企画などが行われていた。
- 16 この喧嘩状態で門の前に並ぶのは、多くの時代における福男から聞かれたことである。1945 年の一番福上田研蔵氏は「そらもう、喧嘩でしたよ」と話された。また 1962 年の一番福、吉井弘氏は生前 2004 年の事件が起こったときにも「このようなことは昭和 30 年代にもたくさんあった」と話していたとのことである。ちょうど昭和 40 年代の門開けレースが中止される時期であり、当時の実態をより正確に知りたい。そのためにより多くの参加者や福男へのインタビューを引き続き行いたい。

(2014 年 11 月 10 日 受理)

年度と出身（青年期の大半を過ごした場所）とのクロス検定																					
	兵庫県	大阪府	京都府	滋賀県	奈良県	神奈川県	北海道	東京都	福井県	宮崎県	福岡県	愛媛県	石川県	島根県	愛知県	岡山県	広島県	栃木県	香川県	大分県	合計
出場回数	2001 年度	14	2	1		1	1														19
	2002 年度	16	6	2	1		1	3		1		1	1	1	1						34
	2003 年度	17	4	4	1	1		2	1		1		1				1	1			35
	2004 年度	13	9	3	1	1		1							1	1			2	1	34
	合計	60	21	10	3	2	3	2	6	1	1	1	1	2	1	2	1	1	2	1	122

別表 1：年度と出身（青年期に居住した居た場所）とのクロス検定

なぜ参加したのか																				
	友人・先輩の面白そうだから・好奇心	自分がかつた	体がきつた	運をつける・脚こまやかる	友人に会えるから	メディアに取組む	記念に・思い	何か癒える・とをしたい	勝ちたい・一番（福男）になりたい	平等に参加できるから	気合を入れるため	ボイスがテレビで活動の一環として	自分にとっての年中行事から	歴史に名前を残したいと思うから	この福男グループに所属しているため	何か行事にかつりけい	高校3年で学用品がほしいため	今年が厄年だから	特になし	
出	20	9		3		2	9	6	7		3	1	4	2		1	1	1	1	71
場	5	4	1	2	1	3	1	3	3	1										24
回	4	2	2						1						1					12
数		1	1		1	1			2							1				6
		1			1															3
					1								1							2
					1															1
					4	6	11	9	13	1	3	1	4	2	1	2	1	1	1	119
合計	29	16	4	1	5	4	11	9	13	1	3	1	4	2	1	2	1	1	1	

別表 2：出場回数と参加動機とのクロス検定

加入表																		
度数	門の開くときの気持ち																	合計
	「絶対勝つ！」 という気分にな った	スローモーション のようだった	興奮する	まるで白銀の 世界が現れた ようだった。	「やっとなん だ」の心境	頭の中が真 っ白になった	感動した	びっくりした	緊張した	恐ろしい・悪い	開放感で一 体であった	苦しかった	妨害させられた	特になし	(状況を最 で勝てな いと思っ た)	むちゃくちゃ であった	ラッキーだ った。	
何回	2	2	1	1	1	3	2	2	3	4	1	1	1	1	1	1	1	24
目の	3					2			3	2		1	1					10
出場	4	1	3			2			1							1		7
か？	5		1															2
	6			1		1												2
	8	3	1	2	1	1		2	7	6						2		1
合計			5		1	9	2	2			1	1	1	1				46

別表 3：出場回数と門が開いた時の気持ちとのクロス検定

度数		なぜ今年も走ろうと思ったのか？														
	来年より良い順 位になる、一番 を取りに行く	門に吸い寄せ られた、自分の 中で年々行書 の一つだから	先輩・友人 の誘い	メディアにもう 一度出たい。 目立ちたい。	体中が熱くなる 体験を、もう一 度してみたい	門に集まっ た友人に会 いたい	去年参加して 楽しかったから	参加する事に 意欲がある と思ったから	今年もこれ で走りだ したいから					合計		
何回 の 出 場 か？	2	15	3	2	2	1	2	1	1	24						
	3	8	2							12						
	4	4								7						
	5									3						
	6									3						
	8									2						
合計	27	27	5	5	2	4	4	2	2	49						

別表 4：出場回数と今回参加した動機とのクロス検定